

和漢古書の情報を読む：複雑さと個性の世界

和漢古典籍研究分科会

沼田 晃佑（身延山大学図書館）

研究発表要旨

和漢古書を図書館資料として現行の目録規則で扱おうとする場合の問題点はどのようなものなのか。書誌記入の具体例を示しつつ専門知識の必要性を述べる。次に古書に数多く捺された蔵書印について、その情報価値を主に伝来の観点から紹介。魅力と奥深さを知ってもらう。最後に和漢古書を適切に組織化・活用出来る大学図書館員が真に求められている状況を訴え、来期の会員募集へと繋げて行く。

〈研究分科会プロフィール〉

日本や中国・朝鮮半島で刊行された古典籍資料について、大学図書館員として必要な書誌学的知識・書誌作成能力を養うことを目指す。テキスト学習と並行して、実際の資料を使った調書の作成実習を行うなかで、情報源への精通、装丁や紙質の違い、刊印修の検討から取り扱いの方法まで経験を通じ学んでゆく。

〈研究活動内容〉

今期、定例の月例会では、基礎知識を養う教科書として廣庭基介、長友千代治著『日本書誌学を学ぶ人のために』（世界思想社）を選び、章節毎に担当を決めた上で輪読し、その要約・発表を行うと共に、加えて会員所属図書館や機関所蔵の現物資料を使って調書を作成、記述の検討を行う実践的作業を活動の柱としてきた。

会場となった大学図書館は必ずよく見学し、保存方法やコレクションについての比較材料を得ることができた。

更に古典籍の世界をより深く理解するために見学活動の機会も持った。印刷博物館や静嘉堂文庫などの機関や、神田の古書街などへ参観。展示されるほどの善本、現在も流通する古典籍の様子などを見て、教養を高めた。

〈次年度予定〉

未定

〈ホームページ〉

なし

和漢古書の情報を読む：複雑さと個性の世界

和漢古典籍研究分科会

沼田 晃佑（身延山大学図書館）

2007年12月13日

1 今期の和漢古典籍研究分科会の活動についての報告

初心者が多かった今期は、教科書を会員で輪読することから勉強を始めることとし、調書作成の実習や見学活動から多くの書誌学的な知識を身につけることができた。反面基礎的な学習に集中した関係で、保存科学や電子化対応などより高次の和漢古典籍の直面する問題についての学習までは及ばなかった。

2 目録作成にあたって

2-1 用語の混乱について

和漢古典籍を扱う上で最初に戸惑うのは一口に古典籍と言っても漢籍と国書(和本)では書誌記述の上での用語が違うということ。和書と洋書の如き違いがあり、更に「日本人の漢文著作」など混乱させるカテゴリーもある。そうした資料の種別、用語法の違いを紹介する。用語対照表を配布。

2-2 調書作成の手順と情報源の読み方

本分科会の中心的な活動とも言える「調書の作成」。調書とは何か。その作成することの意義とは。作成にあたっての手順を説明し、和漢古典籍における情報源の不規則要素の多さについて例示。書誌記述にあたって調書を作成することの有用性と、作成することが出来る人材の必要性を明らかにする。

3 蔵書印の世界

今回の発表では和漢古典籍の特色ある情報源の一つとして、蔵書印を取り上げる。その歴史、意匠の面白さ、加えて書誌記述上の意義や判読の手がかりについて紹介する。

更に「西鶴置土産」「うすゆき物語」の二例から別個の大学図書館に収まっている其々の本が、蔵書印を調べることによって元は一人の持ち主が持っていたというのが判明する伝来の面白さ。「祖庭事苑」のような大量に捺された本の印記の解読作業の難しさ、楽しさなど、

実例を示して説明する。

4 結び、次期会員募集

大学図書館資料としての和漢古典籍は残念ながら殆ど効果的な利用をされずに死蔵されている場合が多い現状は、資料と利用者を繋ぐ図書館員に知識が足りないからという部分も大きい。大学の資産活用の観点からも図書館員がもっと多く和漢古典籍を扱うスキルを身に付ける必要がある。

来期、多くの新しい会員がこの素晴らしい世界に触れて技能と知識を高めて行って頂きたいと望んで止まない。

参考文献

長澤規矩也編著『図書学辞典』三省堂, 1979年

京都大学人文科学研究所編『漢籍目録：カードのとりかた』朋友書店, 2005年

川瀬一馬著『日本書誌学用語辞典』雄松堂書店, 1982年

井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店, 1999年

陣先行著『古籍善本：打開金匱石室之門』上海文芸出版社, 2003年

渡辺守邦, 後藤憲二編『新編蔵書印譜』青裳堂書店, 2001年